

早稲田大学インクルーシブ教育学会

8 月番外編 ニュースレター

2026 年度（令和 8 年度）No.3

非行のメカニズムの理解と支援者としてのあり方

8 月猛暑の中、番外編の研修会を開催しました。講師には元矯正施設の教育担当であり、現在は、様々な学校や教育委員会、矯正関連施設などの委託を受け、非行少年の指導・助言等でご活躍されている小西好彦先生を迎え、矯正教育の現場で培われたアセスメントの理論と教育現場における支援の本質についてご講演いただきました。会場には、小西先生の教え子であり、非行からの更生を経験したお二人の方も登壇し、当時自分自身に起きていたこと、小西先生との出会いで何に気づいたのか、変わろうと思ったのか等を真摯に語っていただきました。

「最大限の適応」としての SOS

小西先生は、いじめ、暴力、自傷、不登校などの不適応行動は、単なる規律違反や不良行為ではないと述べます。それらはむしろ、本人が直面している「最悪の事態（危機的状況）を乗り切るために取った、最大限の適応の形」であり、周囲への切実な SOS であると説明しました。例えば、暴力などの攻撃的な行動であっても、その根本には深い「不安」と「孤独」があります。非行や犯罪に陥る最大の要因は「孤独感」であり、問題行動は孤独を軽減し自分を守るための本人なりにやりくりした結果です。また、これらの行動は「頼ってはいけない方法や人」を選択してしまった結果でもあります。彼らは「頼ってもいい人」に出会えなかったり、適切な頼り方を知らなかっただけなのです。支援の第一歩はその行動の裏にある「困り事」に目を向けることから始まります。

構造的アセスメントによる背景の理解と可視化

効果的な支援には、支援者の「経験や勘」に頼るのではなく、「共通の物差し」を用いた客観的アセスメントが不可欠です。小西先生は、状況、出来事、認知、感情、行動、成果、予測行動のそれぞれについて丁寧にアセスメントするシートを紹介してくださいました。上記項目を丁寧に整理しそれらを関係づけ構造化すること、また、行動の結果得られる「成果」に着目することの必要性を強調しました。そして、問題行動をとった人が誰から、どのような評価を欲しているのか、なぜその成果が必要だったのかという背景を深く洞察することの必要性を説きました。虚勢を張る行動の裏には、特定の集団における「メンツ」や「評価」を維持しなければならないという切実な背景が隠れている場合があります。こうした具体的な例を挙げ、参加者に問いを投げかけながら講義が続いていきました。また、「家族マップ」で家庭内の心理的距離や存在感を可視化し、「人生浮き沈みグラフ」で過去のトラウマや信念の起源を整理するという方法も提示していただきました。

「偽りの自分」から「本当の自分」への回復プロセス

問題行動の本質には、深刻な劣等感を隠そうとする心理的な防衛が存在するといえます。小西先生はこれを「偽りの自分」と「本当の自分」という言葉で説明しました。「偽りの自分」とは自分の弱さや小ささが露呈するのを防ぐため、自分を大きく見せたり優秀に見せたりして、他者に自分を偽ることです。金額は次第にエスカレートし、犯罪を繰り返すことになってしまった例もありました。これは孤独を埋めるために、偽りの姿で他者の評価を繋ぎ止めようとした結果です。更生と

は「偽りの自分から本当の自分に戻ること」であると小西先生はいいます。支援者の役割は、目の前の人が等身大の自分（本当の自分）を受け入れられるよう助けることにあると教えてくださいました。

認知行動療法の適用と感情の言語化による変容

問題行動の改善には、力による抑制ではなく、内面にある未整理の感情を言葉にする支援が必要です。認知は感情や行動に強い影響を与えますが、幼少期の傷つき体験がある場合、表面的な認知の修正だけでは不十分なこともあると小西先生は述べます。暴力などの二次感情としての怒りの背後には、抑圧された一次感情が隠れています。特に「寂しい・悲しい」「悔しい」「羨ましい」の3つに着目することを強調されていました。

外的統制からの脱却と「自己一致」の確立

強い圧力で行動をコントロールする「外的統制」は、自分で自分をコントロールする「内的統制」を育む機会を奪います。これは弱肉強食の論理を教えることになり、指示待ち人間や、権威がない場所で問題を起こす人間をつくってしまうのです。子どもは、支援者が口で言うことと腹の中で思っていることの「不一致（嘘）」を瞬時に見抜きます。学校は、自分の思いを丁寧に尋ね合い、確かめ合える場所であってほしいと小西先生は述べていました。問題行動を起こす子どもたちの本質的な問題は、困った時に心に蓋をして一人でやりくりしようとし、人に相談できないことにあります。学校の先生が「自己一致」した姿勢で、子どもたちが何気ない会話を通して「一人ぼっちではない」と体感できる環境を整えることが、立ち直りへの一歩につながります。

今回の研修会では、問題を起こす人や人格を扱うのではなく問題となっている行動そのものを扱うということ、そして、その行動の背景にあるSOSを読み解くことの重要性を改めて実感しました。アセスメントによって背景を可視化し、支援者が「自己一致」した姿勢で寄り添うこと。インクルーシブ教育の現場において、子どもたちが「本当の自分」でいられる居場所を構築するために、今日の学びを日々の実践に繋げていきたいと考えます。

ご参加頂いた皆様からの感想《一部抜粋》

「アセスメント」は検査を受けさせることと漠然と思っていましたが、こちらで基準を持ちながら、相手を傷つけずに言葉を引き出すことを粘り強く続けていくことであると分かりました。出所された方のお話もありリアリティがあり、考えさせられました。このような機会をいただきありがとうございました。

貴重な時間を作っていただき、ありがとうございました。ありのままの自分を大切にすること、どんな子なのかを想像することを大切にしたいと思いました。インクルーシブな社会を作る時間を考える時間となりました。

小西先生の深い人間理解に基づいた関わりと、それによって人生が変わった方々のお話を聞いて、教師にできることの大きさを痛感しました。アセスメントの全体像を把握し、負担なく把握できる質問力が大事だと思いました。

「学校の先生、自己一致してますか？」その言葉がとても印象に残りました。子どもに寄り添うということは、構造化されたアセスメントを取り入れ、彼らが求めていることを共に考えていくプロセスそのものなのだとことを実感しました。